

	目標・具体的取り組み	取組の状況	取組の成果と課題
生徒指導	楽しい・うれしい・大丈夫の学校生活の実現に向けて ・「生徒指導の実践上の4つ視点」（自己存在感の感受・共感的な人間関係の育成・自己決定の場の提供・安全・安心な風土の醸成）を生かした学級・授業づくりを推進する。 ・「わかつトーク」を通して、温かい集団づくりを推進する。 ・教員アンケート「4つの視点を意識した授業づくりや集団づくりに取り組むことができたか」肯定的回答90%以上	・研究と協力し、研究授業や6月の授業交流の中で「生徒指導の実践上の4つ視点」を意識して取り組むことができた。2学期以降も継続して意識できるように声掛けをしていくたい。 ・「わかつトーク」を提案し、実践できている。「児童は話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができる。」では肯定的な回答が100%高い結果になったが、「相手の考えを最後まで聞き、友だちの考え方を受け止めて自分の考えを伝えている」は課題も見られたので、改善提案し2学期以降も取り組みたい。	
保健体育	運動習慣の保持・増進 ・学校生活において、児童自身が規則正しい生活習慣を維持する一助として、自ら運動に励むことができるようにする。そのために、一校一プランを中心に運動が苦手な児童も、得意な児童も一丸となって取り組める機会を提供する。 ・児童アンケートで「運動することが好き」という質問に対して、肯定的回答90%以上。	・体育委員会の放送で全校に対して休み時間のおすすめ運動を紹介するなど、児童が主体となり全校に運動する習慣をつけることを促すことができた。 ・体育委員会のイベントで、低・中・高学年に分かれて簡単な運動遊びを実施し、「みんなで運動を楽しむ」をテーマに全校で取り組むことができた。 ・1学期の児童アンケートで「運動することが好き」という質問に対して、肯定的回答を89.5%得られた。2学期は、さらに一校一プラン等を通して、仲間と運動することが楽しいと児童自身を感じられるように促したい。	
教育相談	「チーム学校」として、情報を共有し組織的対応の推進 ・不登校につながりそうな登校渋りを「ちょっと気になるカード」等を使い、初期段階から情報共有する。必要に応じて早期にケース会議を行う等、組織的に対応する。 ・担任一人が抱え込まず、日常的に情報を共有し組織的に対応していると感じる教職員の割合が80%以上。	・「ちょっと気になるカード」を通じて情報共有することができた。不登校傾向の児童や別室登校の児童について、ケース会議や面談等を行い、心の相談員・スクールカウンセラーとも連携することができた。 ・2学期をスムーズにスタートできるように、不登校傾向の児童への対応を夏休みに中にしておく。 ・教職員アンケートの結果、全職員が「担任一人が抱え込まず、日常的に情報情報を共有し組織的に交流している」と感じており、良好であった。	
G I G A 推進	GIGAスクール構想の充実 ・GIGA校内研修推進リーダーを中心に、校内研修を進め、教員のICT活用指導力を高める。 ・デジタル学習基盤の効果的な活用に向けた研修を学期に2回以上行う。	GIGA推進リーダーを中心に、校内研修を定期的に行い、よりよい学びに向けた活用について研修会を開いている。調べる活動でICTを積極的に活用しているが、週に3回以上活用している率は低かった。これは、ICTが児童の学びにとって必要かどうかを吟味した結果だと捉えている。夏休みには複数回、ICT活用に向けた研修を計画している。	
道徳教育	特別の教科道徳の授業を中心とした道徳教育の充実 ・授業参観や学校公開日などの機会に年に1回以上、保護者に向けて道徳の授業を公開する。 ・校内での授業交流を機会に授業改善を図り、道徳教育の充実につなげる。	・1学期の道徳教育の研修で学んだことを、夏季休業時に教員に伝達研修を行った。 ・伝達研修の内容を基に、2学期以降に各学年で授業改善を行ってもらうこと、学校の重点項目となる授業の板書や発問、工夫などをデータとして保存し、来年度以降も継続して授業改善を行えるようにする。	
読書教育	読書活動の推進 ・図書利用計画を基に、図書利用の学習を計画的に実施する。 ・「よんでもみて文庫」「よんでもみて+」で学習内容に合った本、図書室前のコーナーに季節・行事に合った本等、その時の児童のニーズに合った本を配架し、本を取りたくなるようにする。	・並行読書や調べ学習など、各学年の学習に応じて積極的に利用を進めることができた。 ・司書による「よんでもみて文庫」「よんでもみて+」の本の紹介で、様々な分野の本を手に取る児童が増えた。2学期も学級で利用する際などに同様の活動を続け、様々な分野の本を児童が手に取れるようにしたい。	
特別支援教育	保護者と子に寄り添う特別支援教育の推進 ・様々な背景をもつ家庭が多くなってきており、保護者も子どもも困り感を抱えている現状から、その悩みを受け入れていいく。 ・必要に応じて、校内委員会を開いたり、専門員派遣制度を利用したり、市の教育研究センターや医療機関につなげたりする。 ・個に応じた教育支援を行い、学習への抵抗感を少なくし、充足感が得られるようにする。	・児童理解の会やちょっと気になるカードへの書き込みを通して、全職員で共通理解をしながら児童や保護者に対応してきた。教育センターにつなげたり、通級指導教室に入級したり、就学相談にかかったりと個に応じた対応ができた。 ・日々の授業でも、支援の必要な児童に対して教員の100%が何らかの策を講じており、子どもたちの充足感も高くなっている。	
家庭・地域社会との連携	地域の特性を生かした教育活動の充実 ・生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域人材・地域教材を活用して調べたり学んだことを他者へ発信したりする探究学習を積極的に推進する。そのことを通して地域を理解し地域を誇りに思う心情を高める。 ・地域人材・地域教材の活用に努めている教員80%以上。	・90%以上の職員が肯定的な回答をし、生活科の町探検や、総合的な学習の時間では全ての学年が地域の人材・地域教材を積極的に活用することで、多様な他者との学びが充実している。また前例踏襲を避け、児童の思いに沿った交流相手を選択している学年が多く、継続していくとよい。	

学校関係者評価	
---------	--